様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０７８８

研究課題名（和文）20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究

研究課題名（英文）Cultural research on control of infectious diseases and on lives in the 20th century Japan

研究代表者
石居　人也（ISHII, Hitonari）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：２０６３５７７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ハンセン病の国立療養所、大島青松園と沖縄愛楽園をおもなフィールドとして、療養所内外にわたる交流と療養所を超えた病者の移動を跡づけ、その意味について考察した。具体的には、（１）療養者の手による逐次刊行物や自治会に残る史料を素材として、信仰や自治などに生きた療養者の生を描き、（２）療養者の郷里に残る墓所の調査をとおして、療養者の郷里とのつながりを問い、（３）療養者と市民と研究者による対話の場を設けて、抑圧や戦いのみに収斂しない療養者の多様な生を聞いた。また、（４）大島から熊本を経て沖縄に渡って愛楽園の基礎を築いた青木恵哉の生涯から、療養所を超えた病者の移動やつながりについて論じた。

研究成果の概要（英文）：In this research, we examined exchangings inside and outside the sanatorium and movement of sick people not tied to sanatorium, with the national sanatorium for Hansen's desease, Oshima Seishoen and Okinawa Airakuen as the main fields.
Specifically, (1) we depicted lives of patients in sanatorium living in faith and self-government activities, using serial materials issued by themselves and historical materials left in the self-governing office as materials. (2) We considered the connection with the patient's hometown by investigation of the grave in him hometown. (3) Set up forums for dialogue between people in sanatorium recovered from Hansen's disease, citizens and researchers, we listened to them talking about various ways of living by those who don't converge only in oppression and struggle. (4) Focused on Keisai AOKI who went to Okinawa from Oshima via Kumamoto and built the foundation of Airakuen, We argued about the movement and connection of sick people not tied to sanatorium.

研究分野：日本史

キーワード：ハンセン病　療養所　キリスト教　信仰　自治　隔離　生　歴史

１．研究開始当初の背景

（１）近現代日本のハンセン病およびハンセン病者をめぐる歴史研究は、従来、1907 年の法律「癩予防ニ関スル件」から、1996 年の「らい予防法」廃止まで、90 年ちかくにわたって続いた隔離政策の問題性を明らかにする、との問題意識に裏打ちされるかたちで進められてきた。そのような立場を代表する論者のひとりが、藤野豊である。藤野は、『日本ファシズムと医療―ハンセン病をめぐる実証的研究―』（岩波書店、1993 年）や『「いのち」の近代史―「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病者―』（かもがわ出版、2001 年）などにおいて、国家の強い抑圧のもとで虐げられ、時として抑圧に抗しようと立ちあがる病者の姿を描きだした。それは、隔離の場としての療養所にひきつけていえば、療養所当局（園長や事務・医療スタッフ）のもとで抑圧され、それに抗う療養者という構図の提示であった。この構図は、「絶対隔離」などとも称される、病者の終生にわたる強制的な隔離のイメージとともに、ハンセン病問題を語る際の「型」のひとつとして、強い影響力を有してきた。

（２）一方、蘭由岐子『「病いの経験」を聞き取る―ハンセン病者のライフヒストリー―』（皓星社、2004 年）や坂田勝彦『ハンセン病者の生活史―隔離経験を生きるということ―』（青弓社、2012 年）などは、聞きとりを方法として療養者一人ひとりの経験に迫ることで、さきの「型」にはかならずしも収まらない隔離の姿を描きだす。また、『長島は語る―岡山県ハンセン病関係資料集―』前・後編（岡山県、2007・2009 年）、松岡弘之編『隔離の島に生きる―岡山ハンセン病問題記録集・創設期の愛生園―』（ふくろう出版、2011 年）は、国立療養所長島愛生園（岡山県瀬戸内市）の療養者の自治活動関係史料などを収録し、文字史料から療養者の生の具体相を掘りさげている。さらに、廣川和花『近代日本のハンセン病問題と地域社会』（大阪大学出版会、2011 年）は、隔離政策のもとにあっても、療養所に入ることなく生きた病者や、かれらを支えた仕組みが存在したことを明らかにしており、療養所外をも視野に入れて隔離を考察する必要性が浮き彫りになった。これらは、ハンセン病をめぐる新たな歴史研究の動向だといえよう。

（３）研究代表者と研究分担者の阿部安成は、国立療養所大島青松園（香川県高松市）をおもなフィールドとして史料調査をかさね、研究成果を発表してきた。第四区療養所（大島青松園の旧称）の創設後間もない 1914 年に療養者が結成したキリスト教信徒団体、霊交会の教会堂調査では、堂内に残る 2000 点超の蔵書のなかに、同会が 1919 年から発行していた逐次刊行物『霊交』の大半が現存することが確認された。また、『霊交』が島外の個人や団体の刊行物と交換されていたこと、信仰を介して島外の個人や団体との行き来があったことなど、隔離政策下における療養所外との交流の様子が明らかになった。さらに、入所者自治会（療養者の自治組織）の事務所に残る史料の調査・分析を加えることによって、信仰を介したネットワークと自治・文化活動を介したネットワークの中心的な担い手がかさなりあい、療養所内の交流が活性化していったこともわかってきた。こうした調査・研究の成果を公開するなかで、大島で生活したのち、熊本の回春病院を経て、1927 年に沖縄へわたって同病者の救済にあたり、国立療養所沖縄愛楽園（沖縄県名護市）の基礎を築いたとされる、青木恵哉に関する史料の所在情報が、森川恭剛（研究分担者）によってもたらされた。

（４）以上の経緯をふまえて、研究代表者および研究分担者は、あらためて療養所に残る史料に即して、抑圧と抵抗の構図に収斂しきることのない療養所や療養者の姿を、実証的に描きだす必要性を痛感した。そして、療養者の交流や移動について掘りさげることが、隔離政策下における療養者の生をめぐる研究の新たな扉を開くことにつながると考えるに至った。

（５）調査の過程で療養者との関係が築かれてゆくなかで、文字史料にはあらわれない、療養者の「日常」にまつわる話をしばしば耳にした。療養者の平均年齢がすでに 80 歳を超え、「終末期」という言葉が療養者自身の口をついてでるようになっている大島青松園では、史料の保存・公開・活用への道筋をつけることとならんで、療養者への聞きとりをおこなうことも喫緊の課題となっている。それゆえ、史料調査とあわせて、聞きとり調査もおこなうことが不可欠との認識も有するようになった。

２．研究の目的

（１）大島青松園の霊交会に集った人びとが、信仰を介した療養所内外とのいかなる交流のなかで生きてきたのかを、戦前の逐次刊行物『霊交』や、その後継紙たる戦後の『大島霊交会 週報』、および療養所外からもたらされた刊行物など、霊交会教会堂に残る史料を用いて考察する。

（２）大島青松園の入所者自治会事務所に残る日誌をはじめとした史料、および療養所内の逐次刊行物が軒並み廃刊や休刊を余儀なくされた戦時下に、療養者の手稿を束ねて冊子体とした一点ものの「逐次刊行物」たる、手書き手づくり『青松』などを用いて、自治を志した療養者の療養所内におけるつながり、および他の療養所の療養者との交流につ

いて分析する。

（３）大島青松園には、入所者自治会が受贈・購入した図書や逐次刊行物を、療養者の閲覧に供する図書室（文化会館図書室）が存在する。その蔵書を調査することで、将来にむけた保存・公開・活用方法の検討や、療養所の読書文化を解明する端緒とする。

（４）複数の療養者と複数の聞き手とが場を共有し、自由に対話する形式で聞きとりをおこなうことをとおして、文字史料には残りにくい療養者の「日常」に光をあて、療養者の生の多様性を考える糸口とする。

（５）徳島県出身で、発病後、大島でキリスト教と出会い、熊本の私立回春病院を経由して、療養所のなかった沖縄にわたって、病者にとっての「安住の地」を求めて歩いた青木恵哉の半生を描いた著作『選ばれた島』の初版と、青木の死後に発行された同書の復刊版とを比較検討し、両版の異同や性格、それぞれの版がもった意味について考察する。

（６）沖縄愛楽園に残る、『選ばれた島』に関するものと思われる手稿や、書簡・写真などを含む青木恵哉関係史料の分析をとおして、大島を離れて以降、大島の人びと、とりわけ霊交会の会員との交流の様子を跡づけ、青木の経験がもつ意味について考える。

（７）調査・研究の全体をとおして、一点一点の史料を丁寧に読みこみ、一人ひとりの療養者と予断を排してむきあうときにはじめて聞こえてくる、抑圧－抵抗の構図に収斂しきることのない声に耳を澄ます。そうして聞こえてきた声をとおして、療養者の「日常」に迫ることは、療養者の生の多様性を視野に入れながら、それをも含みこんで成りたつ隔離について問うことにつながると考えている。そのため、交流や移動の観点を重視しつつ、史料の分析と聞きとりとをかさね、隔離政策下における療養者の多様な生のありように触れ、その多様性に込められた意味を問うことを目指す。

３．研究の方法

（１）本研究のおもなフィールドは国立療養所大島青松園（香川県高松市）と国立療養所沖縄愛楽園（沖縄県名護市）であり、調査や作業はそれぞれにおいて併行しておこなった。

（２）大島青松園に関してはおもに、①キリスト教霊交会所蔵史料の調査・デジタル撮影を進め、②同会の逐次刊行物『霊交』のリプリント版を刊行した。また、③霊交会を場とした信仰と交流のあり方について、現存する史料の特質と内容に即して分析し、④単行書を刊行した。⑤入所者自治会所蔵史料の調査・デジタル撮影、⑥文化会館図書室蔵書の調査・デジタル撮影、⑦手書き手づくり『青松』の調査・分析を進めた。⑧療養者と市民と研究者による対話の場を設け、⑨相互の自由な対話のなかから療養者の生に迫った。

（３）沖縄愛楽園に関してはおもに、①青木恵哉関係史料の調査・デジタル撮影を進め、②調査の成果をふまえたシンポジウムや、③シンポジウムの成果と課題を継続的に検討する研究会を開催した。

（４）以上の調査・研究の成果をふまえて、交流と移動の観点からいかなる療養者の生のありようが浮かびあがるのか、そしてそれはハンセン病という問題や、隔離という処方を考えるうえで、どのように意味づけることができるのかを総合的に分析し、研究成果を発表した。

４．研究成果

（１）大島青松園のキリスト教信徒団体、霊交会が 1919 年に創刊し、1940 年に廃刊となった逐次刊行物『霊交』を、近現代資料刊行会よりリプリント版として刊行した。『霊交』は、現存する大島青松園内最古の逐次刊行物であるとともに、全国的にみても、現存する 1920～30 年代の療養所内逐次刊行物という点で、希少性をもつ。調査によって、創刊当初の一部の号を除いた大半が発見されており、既発見の全号を収めたリプリント版の史料的価値は高い。1909 年に創設された大島青松園（旧称、第四区療養所・大島療養所）は、日本における公立療養所の草分けのひとつであり、草創期の公立療養所において宗教、とりわけキリスト教がもった意味がみえてくる。また大島では、霊交会の中心的な担い手が、療養所内の自治活動の中心的な担い手でもあったことから、キリスト教信徒のコミュニティにとどまらず、療養所における療養者の自治を考える基礎史料ともなる。

（２）『霊交』はもちろん、霊交会の教会堂など大島での史料調査の成果をふまえて、霊交会に集った人びと、とりわけ三宅官之治・長田穂波・青木恵哉・石本俊市の４名を軸に、療養所と療養者の生をめぐる歴史を描きだし、一書（阿部安成『島で―ハンセン病療養所の百年―』）にまとめて、刊行した。それは、「生き抜く」や「たたかう」に代わって「つながり」や「結びつき」「結びあい」を軸に療養所や療養者の生を描く実践としての意味をもっている。

（３）療養所内はもちろん、療養所外においても、フィールドワークを意識的におこなった。とりわけ、霊交会の創設信徒である三宅官之治の墓碑が、郷里の岡山県にあることを

知ったことをきっかけにおこなった調査では、充実した成果が得られた。ハンセン病者は、ひとたび療養所に入ると、郷里とのつながりを自ら断つ、あるいは断たざるを得ない状況におかれるとの理解が一般化しているが、1944 年に建てられた三宅の郷里の墓碑の存在は、かかる理解がすべてではないことを伝えている。三宅の墓碑をめぐっては関係者との邂逅があり、聞きとりをおこなう機会にも恵まれた。また、霊交会創設 100 周年（2014 年）を期して、霊交会の現在の会員とともに墓所を訪ねることもできた。このことはまた、霊交会の現在の会員が歴史への意識を喚起するひとつの機会ともなった。このほかにも、大島周辺の海域や島から「療養所の島」がどのようにみえているのか、対岸の高松や庵治からはどうかといった、空間感覚や認識を考察の対象とするべく、周辺地域のフィールドワークも開始した。

（４）大島青松園では、毎年度、全４～５回の連続企画〈話（わ）のアトリエ〉を開催した。従来の、聞き手（調査者）と語り手（被調査者）が固定化した聞きとりでは、療養者の多様な生や「日常」の様子を知ることができないのではないかとの問題意識から出発したこの企画は、療養者と市民と研究者がひとつの場を共有し、研究者ないしゲストスピーカーによるハンセン病や療養所にまつわる短い講演（話題提供）ののち、その話題を手がかりに自由な対話をおこなうものである。それにより、双方向的で、自由な語りの場を生みだすことを企図している。回をかさねるごとに、講演をきっかけにするものから、次第に写真・映像・食・音楽・文学といった素材をきっかけにするものへと、スタイルが変化してきた。話はときに、わたしたちの想像を超えてひろがり、療養者の豊かな生の具体相の一端に、触れることができた。

（５）大島青松園ではまた、療養者の自治組織に関する史料の調査も進めた。そのひとつは、戦中から戦後初期にかけて、療養所内の逐次刊行物が廃刊や休刊を余儀なくされてゆくなかで、手稿を綴じるかたちでつくられた１点ものの「逐次刊行物」、手書き手づくり『青松』の調査と分析であり、いまひとつが、入所者自治会が受贈・購入した刊行物がならぶ文化会館図書室の蔵書調査と分析である。前者はリプリント版の刊行にむけた作業が進み、後者では、戦前の受贈図書や蔵書管理の一端がうかがえる史料がみつかった。いずれからも、伝えることや受けとることに対する療養者の高い意識がうかがえ、今後さらにふみこんだ分析をおこなう必要がある。

（６）大島から熊本の回春病院を経て沖縄にわたり、病者にとっての「安住の地」を求めて歩いた青木恵哉の関係史料の調査を、大島・沖縄それぞれでおこなうとともに、回春病院跡に建つリデル、ライト両女史記念館を訪ねた。それらの成果をふまえつつ、青木の半生を描いた著作『選ばれた島』の初版（1958 年）と復刊版（1972 年）とを比較検討し、両版の異同と、それがもつ意味を考察するとともに、ふたつの『選ばれた島』を収録したリプリント版を刊行した。初版と復刊版には性格の違いがあり、復刊版には青木自身の意図を超えた「修正」がみられるにもかかわらず、復刊版が青木による『選ばれた島』そのものであるかのように扱われている現状に警鐘を鳴らすとともに、初版を利用する可能性を広く担保することに寄与した。

（７）沖縄愛楽園での史料調査や『選ばれた島』の分析の成果をふまえて、青木恵哉および愛楽園の草創期について考えるシンポジウム「青木恵哉～愛楽園の礎となった療養者～」を沖縄愛楽園交流会館で開催し、研究代表者・分担者いずれもが登壇した。現在、日本に 13 ある国立療養所のうち、唯一病者によって設立された療養所などとも評される沖縄愛楽園の「創設者」青木恵哉と草創期の愛楽園を、現地で、療養者や市民とともに考える機会となった。報告・議論をとおして、従来『選ばれた島』の記述に大きく依拠しながら描かれてきた「青木恵哉」像を、表象のされ方、沖縄以前、地域住民との関係、療養所創設以降、新発見史料、などをふまえてとらえなおす第一歩とすることができた。

（８）シンポジウム「青木恵哉～愛楽園の礎となった療養者～」で得られた手がかりと明らかになった課題とをふまえて、シンポジウム登壇者を中心とした研究会を継続的におこなっている。沖縄での史料調査や史料整理が併行して進められており、シンポジウム・研究会の成果とあわせて、青木恵哉や愛楽園をあらためて考えるための論集を刊行する準備を進めている。

（９）研究期間をとおして、療養所内外にわたる人と人とのつながりや、人やモノの行き来に関する具体相が、文字史料や対話（聞きとり）を通じてみえてきた。それは、現在も根強く存在する、ハンセン病者・療養者を、あまねく抑圧され、それに抗してたたかう主体としてとらえようとする志向や、病者・療養者自身がかならずしも自覚的ではなかった事象までをも抑圧や抵抗のあらわれととらえたり、抑圧や抵抗との関わりでは説明しにくい事象を捨象したりといった、病者・療養者をとりまく状況を、抑圧と抵抗の二元論のもとに描きだす叙述を、批判的に乗り越える可能性をもつ。そして、そうした療養者の多様で豊かな生が展開された一方で、それをも包含して感染症管理が成りたってきたことがもつ意味のおもさが、あらためて突きつけられることになった。そのことをどのようにとらえるのかが、次なる課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 29 件）

①石居人也、生・病・死、生存の歴史学、東京歴史科学研究会編、歴史を学ぶ人々のために―現在をどう生きるか―（図書所収論文）、岩波書店、査読無、2017、pp.303-320

②石居人也、歴史研究最前線 81 近代日本のハンセン病と「絶対隔離」、歴史地理教育、査読無、854 号、2016、pp.56-61

③阿部安成、石居人也、「を生きた」「に生きる」を問う―『星ふるさとの乾坤』と『理性主義と排除の論理』を読む―、滋賀大学経済学部研究年報、査読無、23 号、2016、pp.79-97

④阿部安成、シリーズ『青松』を読む⑦ 手づくると、戦ひと、挙島へ―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―、滋賀大学経済学部研究年報、査読無、23 号、2016、pp.99-130

⑤阿部安成、シリーズ『青松』を読む⑩ 手づくりの記録―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―、彦根論叢、査読無、410 号、2016、pp.68-81

⑥阿部安成、『文芸民族』という場所（１）―1940 年に香川で創刊された同人誌を知る―、彦根論叢、査読無、408 号、2016、pp.52-62

⑦阿部安成、鈍い剝脱―国立療養所菊池恵楓園社会交流会館特別企画展「入所者たちの足跡」批評―、滋賀大学環境総合研究センター研究年報、査読無、13 巻 1 号、2016、pp.59-70

⑧阿部安成、なぞる／たどる―国立療養所菊池恵楓園社会交流会館特別企画展「入所者たちの足跡」批評―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、249 号、2016、pp.1-17

⑨阿部安成、楓の印刷―国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の文芸誌―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、246 号、2016、pp.1-13

⑩阿部安成、楓の手づくり―国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の総合誌―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、245 号、2016、pp.1-54

⑪阿部安成、シリーズ『青松』を読む② 手づくりで詠む―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、244 号、2016、pp.1-23

⑫阿部安成、シリーズ『青松』を読む① 手づくりで始まる―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、243 号、2015、pp.1-17

⑬阿部安成、復刊のときへ―ハンセン病をめぐる国立療養所における総合誌と〈戦後〉―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、242 号、2015、pp.1-37

⑭阿部安成、ハンセン病を視（み）せてあげる―ＮＨＫ放送の２つの番組からドキュメンタリ・リテラシへ―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、234 号、2015、pp.1-37

⑮阿部安成、ドキュメンタリ・リテラシの稽古―みる、よむ、かんがえる―（１）、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、233 号、2015、pp.1-19

⑯阿部安成、異物混入―知念ウシを読む―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、231 号、2015、pp.1-24

⑰阿部安成、忽然と、猛禽―『司祭平服と癩菌』書評余波―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、230 号、2015、pp.1-75

⑱阿部安成、私と私達と彼等―ハンセン病療養者の著述『選ばれた島』を読む―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、225 号、2015、pp.1-56

⑲阿部安成、ラディカル・ヒストリ・アワァ―療養所がある島を過ごす―、滋賀大学経済学部研究年報、査読無、22 号、2015、pp.37-61

⑳阿部安成、書評 和倉一広『司祭平服と癩菌』吉田書店、図書新聞、査読無、3218 号、2015、p.3

㉑阿部安成、人物誌を整える―ハンセン病療養者青木恵哉の描き方―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、224 号、2015、pp.1-16

㉒阿部安成、復刊事情―ハンセン病療養者の著作『選ばれた島』をめぐる―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、223 号、2015、pp.1-40

㉓石居人也、社会問題の「発生」、大津透、桜井英治、藤井譲治、吉田裕、李成市編、岩波講座 日本歴史 16 巻 近現代 2（図書所収論文）、岩波書店、査読無、2014、pp.281-314

㉔阿部安成、series 話トリエ 03 療養所の外へ、島の外へ―キリスト教霊交会創設者の墓前礼拝―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、219 号、2014、pp.1-53

㉕阿部安成、シリーズ『藻汐草』を読む（３）報謝する発信―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、218 号、2014、pp.1-22

㉖阿部安成、シリーズ『藻汐草』を読む（２）継続する発信―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、217 号、2014、pp.1-13

㉗阿部安成、series 話トリエ 02 サミシイオモイ―〈話トリエ〉のなりたちにさかのぼって―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、213 号、2014、pp.1-25

㉘阿部安成、石居人也、series 話トリエ 01 あれからずっと、あれから、ずっと―国立療養所大島青松園在住者の顕彰碑をめぐるその後―、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、211 号、2014、pp.1-38

㉙阿部安成、松岡弘之、逐次刊行物があらわす療養者の生―療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究―、滋賀大学環境総合研究センター研究年報、査読無、11 巻 1 号、

2014、pp.73-79、82-84

〔学会発表〕（計１件）
① MORIKAWA Yasutaka 、 100 Years of Hansen’s Disease in Okinawa、Sorokdo National Hospital 100th Anniversary International Conference、2016 年 5 月 17 日、Sorokdo（Korea）

〔図書〕（計３件）
①阿部安成、石居人也監修・解説、青木恵哉著、渡辺信夫編、近現代資料刊行会、選ばれた島、2015、650
②阿部安成、サンライズ出版、島で―ハンセン病療養所の百年―、2015、191
③阿部安成監修・解説、近現代資料刊行会、霊交 全６巻別冊１、2014、3061

６．研究組織

(1)研究代表者
石居　人也（ISHII, Hitonari）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：２０６３５７７６

(2)研究分担者
阿部　安成（ABE, Yasunari）
滋賀大学・経済学部・教授
研究者番号： １０２７２７７５

森川　恭剛（MORIKAWA, Yasutaka）
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号： ２０２７４４１７